令和４年（2022年）人間環境大学卒業生アンケート調査結果

Ⅰ．調査概要

１．実施期間：令和４年９月16日～９月30日

２．調査対象：2019年度・2021年度卒業生が就業する67施設看護管理者

卒業生：　卒業生全員（385人）

３．調査方法：管理者：無記名自記式アンケート調査

2019年度・2021年度卒業生卒業生が就業する施設に質問紙を送付し、回答を依頼した。

卒業生：　卒業生全員（385人）Googleフォーム

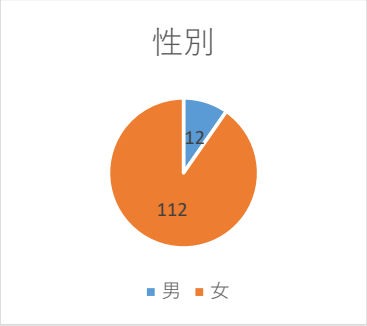
Ⅱ．調査結果の概要

１，対象の概況

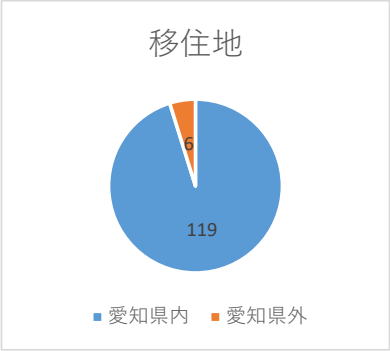
総数	67施設
返信	41施設
回収率	59.70%

	卒業生	回答数	回答率
2018年度	94	20	21,3%
2019年度	96	35	36,5%
2020年度	100	23	23%
2021年度	95	48	51%
		126	

1)性別



2）居住地



２．就業状況

１）就業状況

仕事をしている	125
仕事をしていない	0
休職中	0
学生	対象外

２）就業免許

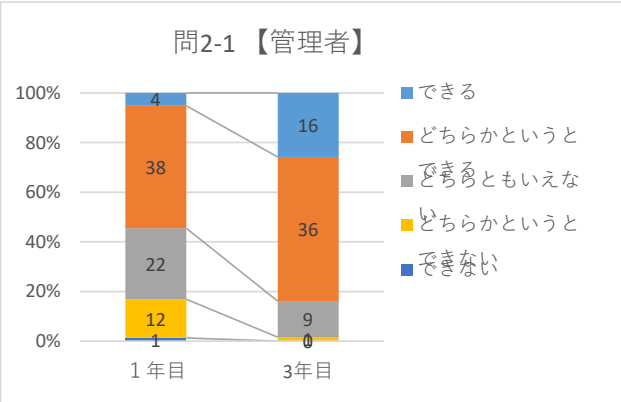
看護師	123
保健師	1
養護教諭	1
無回答	

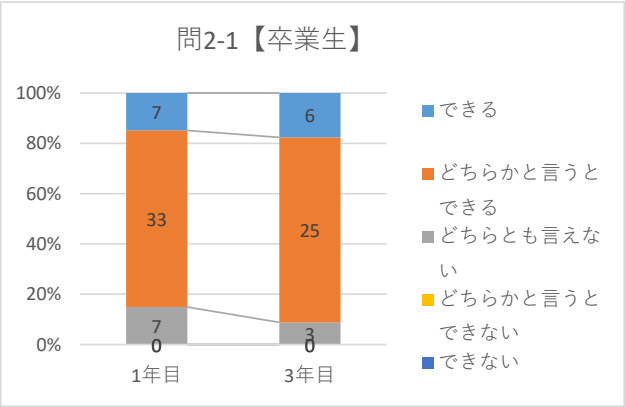
３）就業場所

一般病院	123
診療所	0
学校	1
保健所・保健センター	1
無回答	

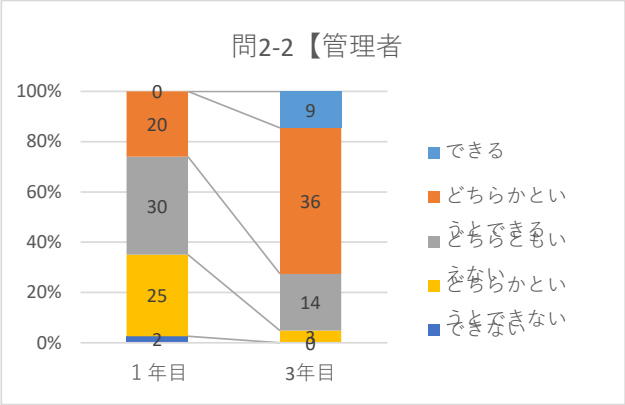
3.　看護実践能力評価（自己評価、管理者評価）

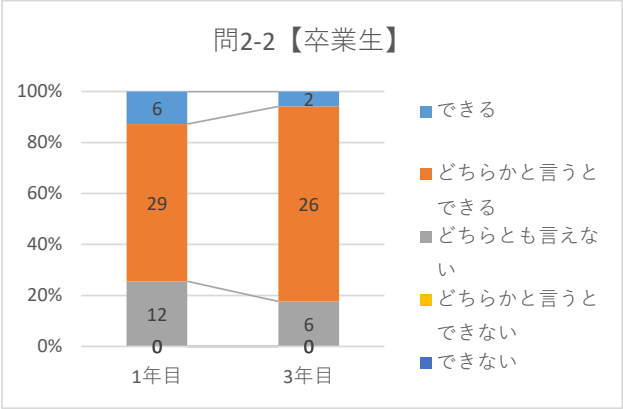
問２-1正確な知識と技術を対象に安全で基本的な看護実践



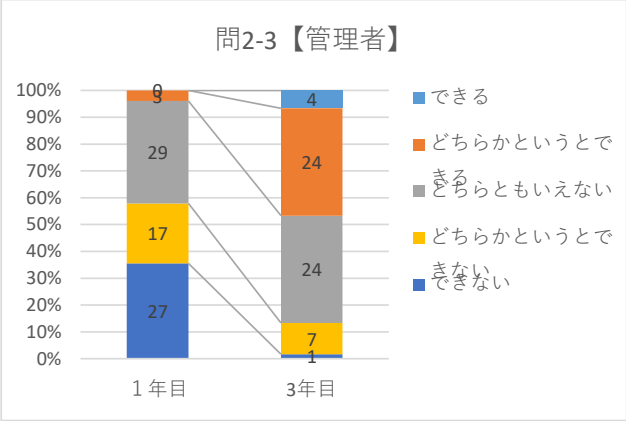


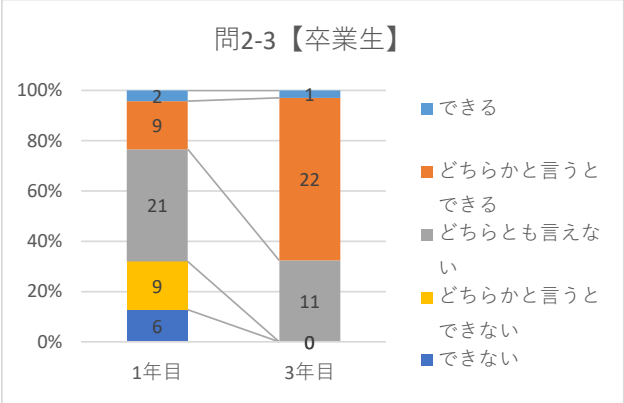
問2-2問題解決に向けた対象の特性に応じた看護実践



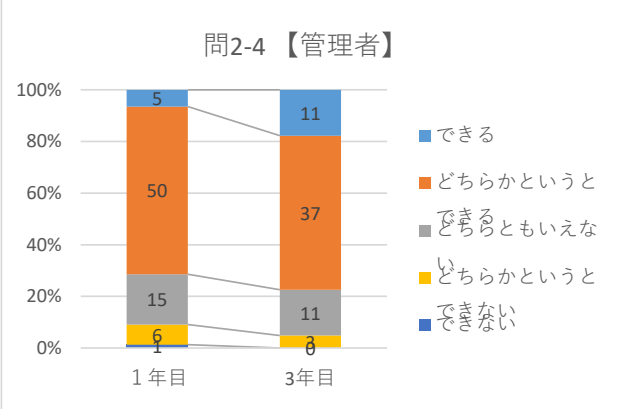


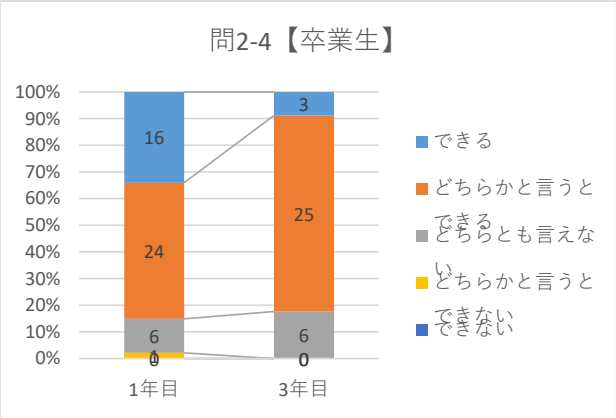
問2－3緊急時の対応



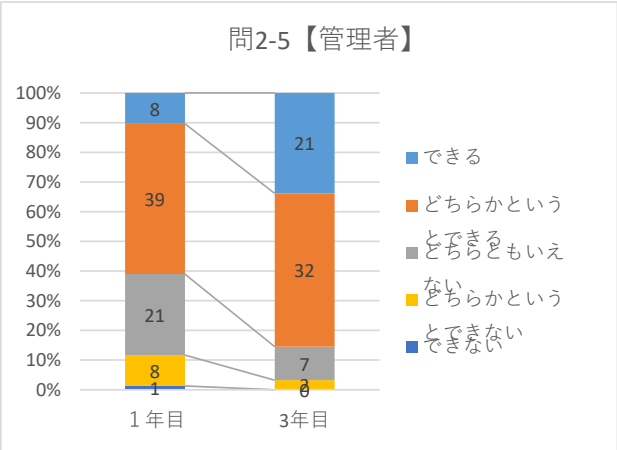


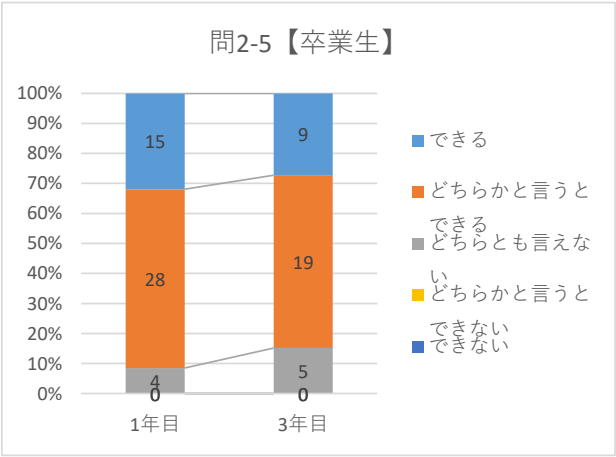
問2-4看護実践や自己の成長のために他者の支援を求めること



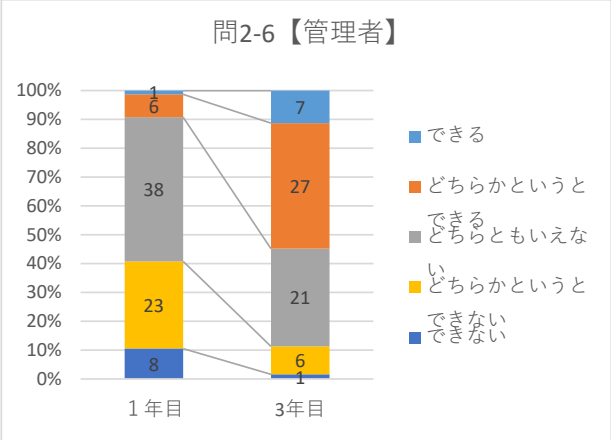


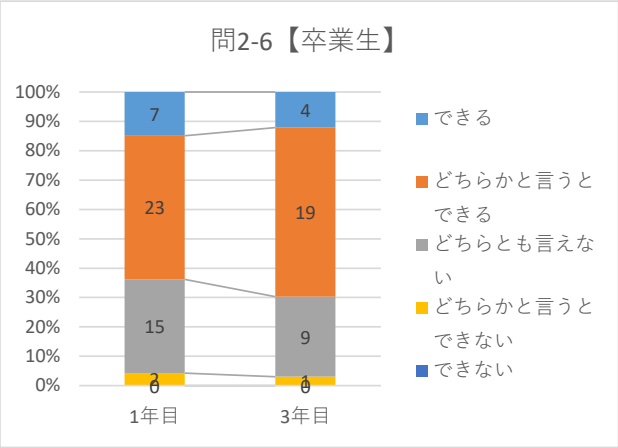
問2-5チームの一員として自分の役割を認識した行動



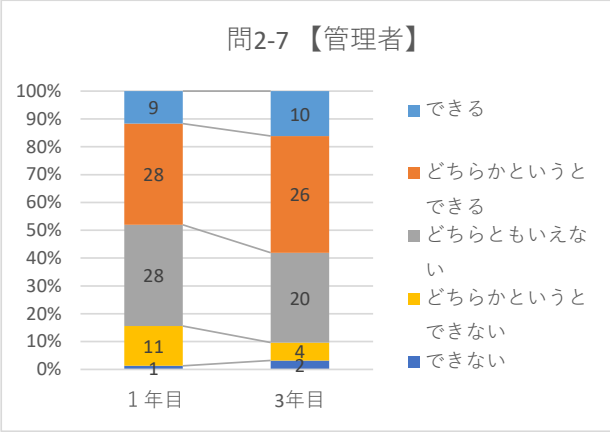


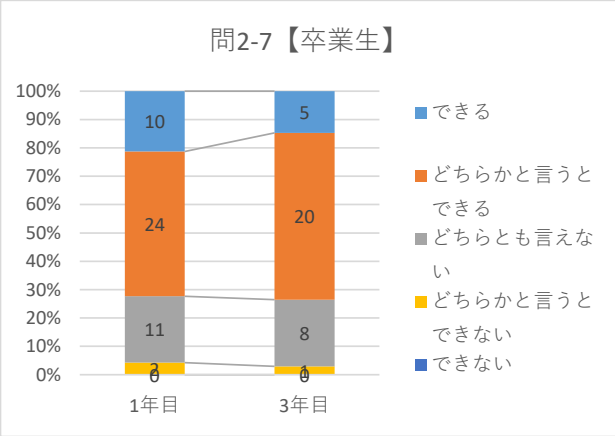
問2-6日常業務の中での問題提起



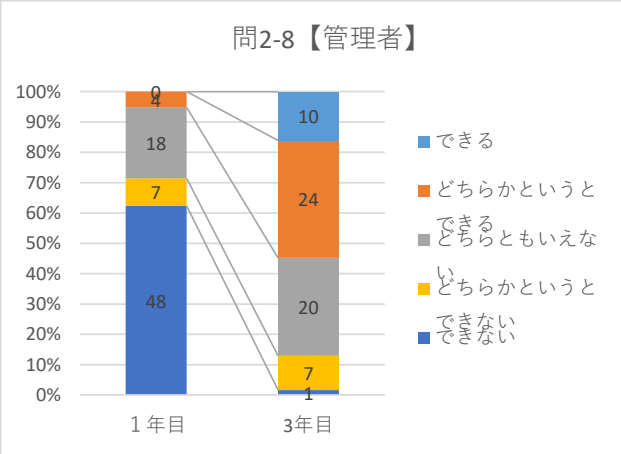


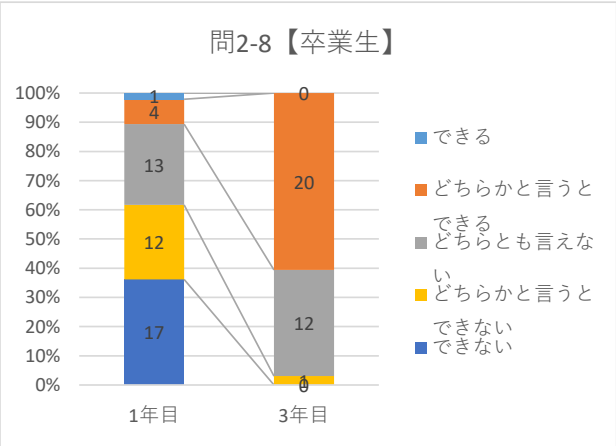
問2-7主体的に学習の場を求め、自己の課題に取り組むこと





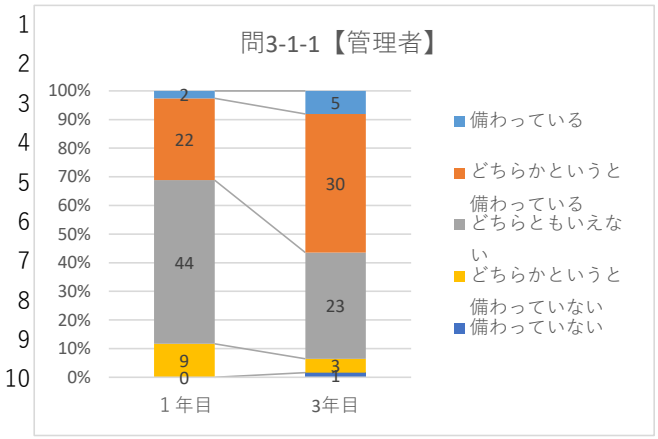
問2-8後輩や学生を指導すること

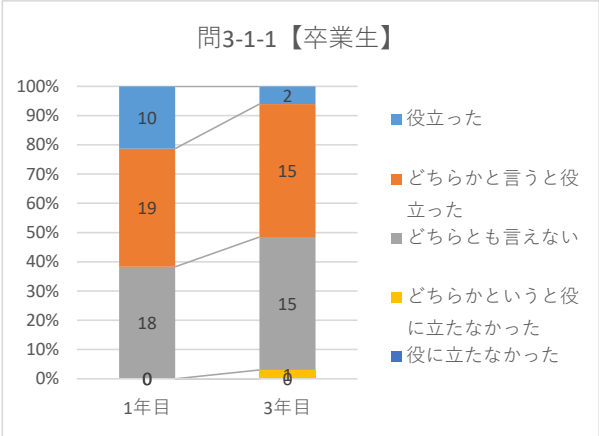




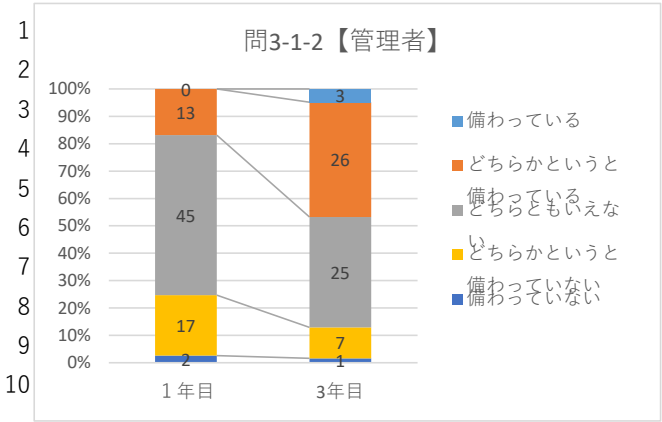
４． 学部教育での学びについて、ディプロマポリシーを評価

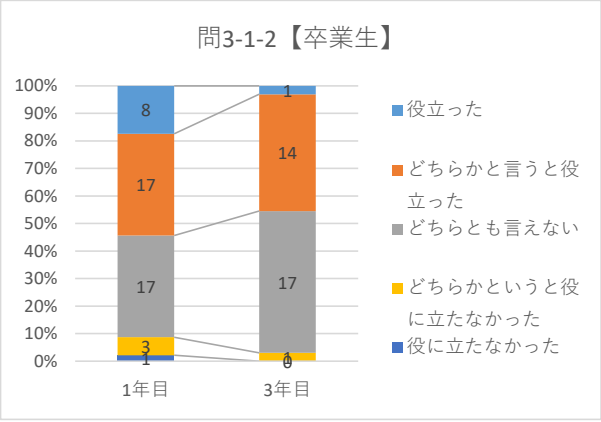
問3-1豊かな人間性と広い視野１：歴史、文化、社会、環境と人間に関する幅広い教養を持ち、人々の多様性を理解し、人間関係を築くことができる



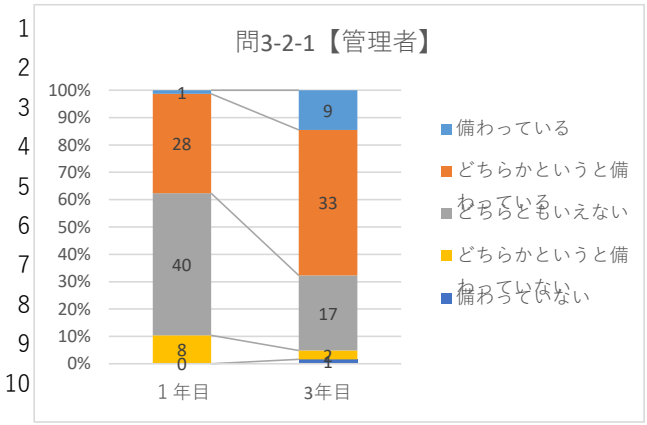


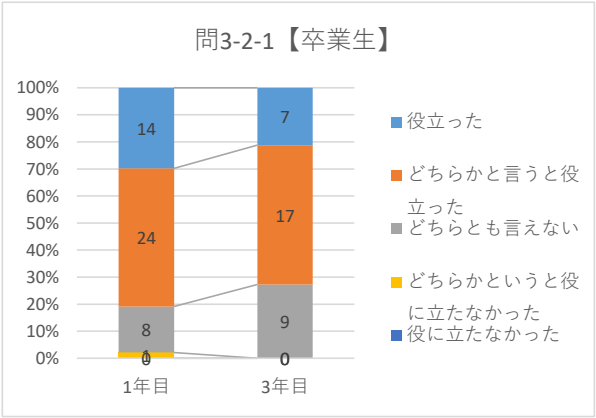
問3-1-2豊かな人間性と広い視野2：グローバルな視野を持ち、人々の多様な健康ニーズと生活を多面的に捉えることができる



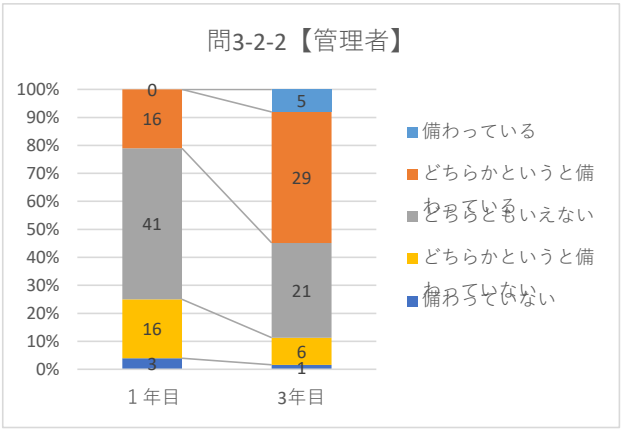


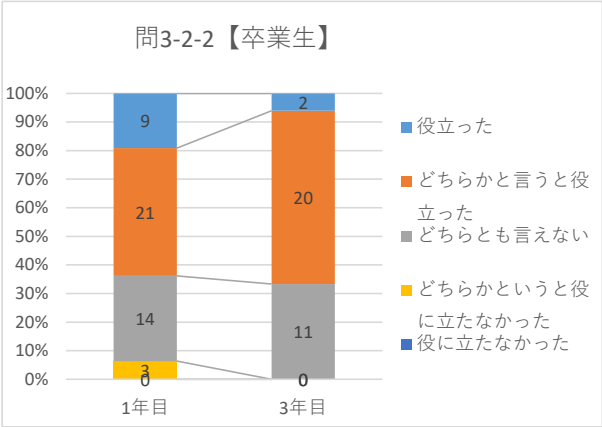
問3-2-1看護の専門的知識・技術1：人々の健康ニーズに対応（予防、改善、解決）するための看護実践に必要な基礎的能力を身につけている



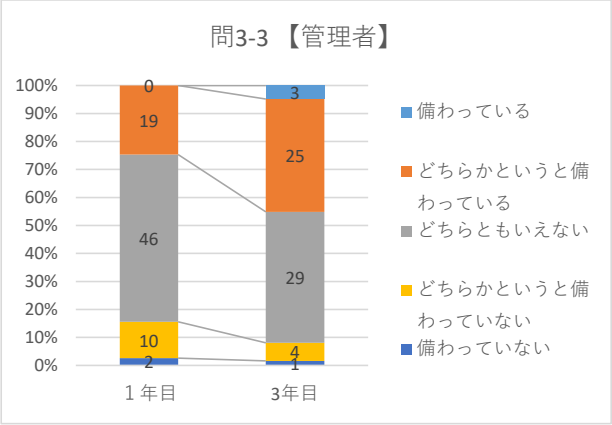


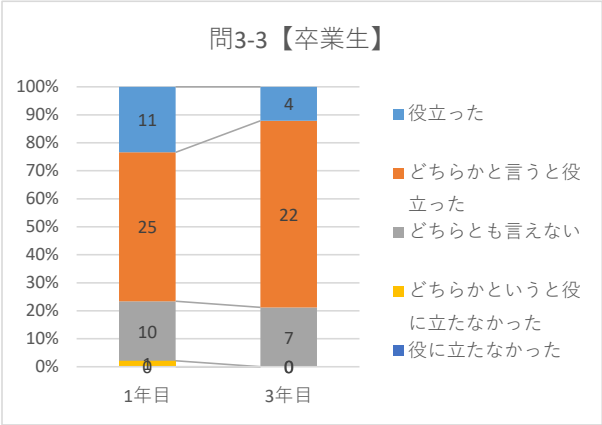
問3-2-2看護の専門的知識・技術2：保健医療福祉において調整・連携し、協働する能力を身につけている



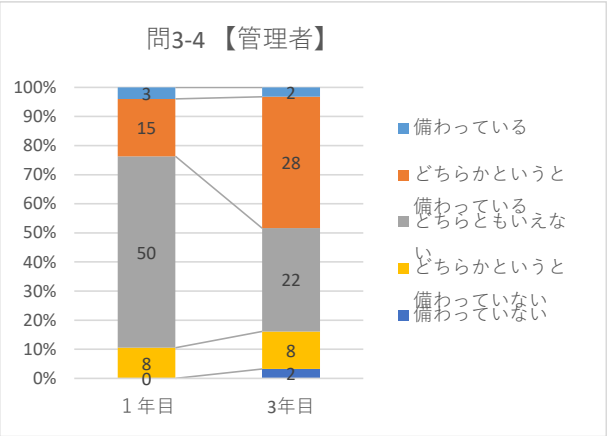


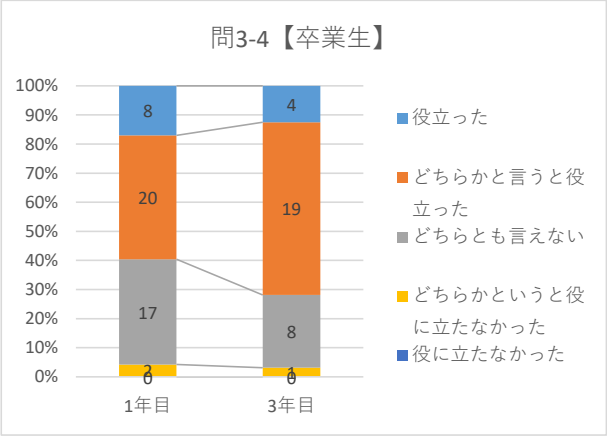
問3-3看護専門職としての判断力：専門職業人としての高い倫理観をもち、科学的・論理的思考に基づいて判断することができる



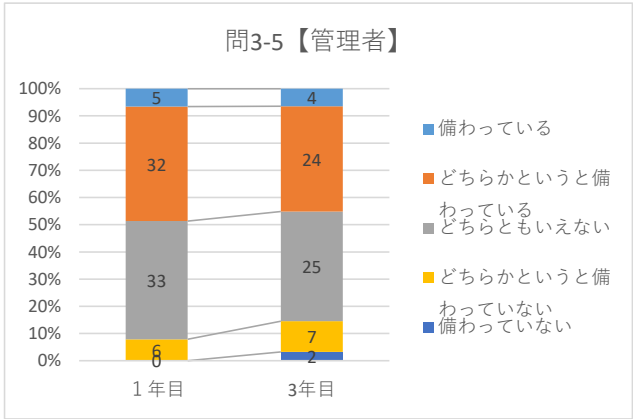


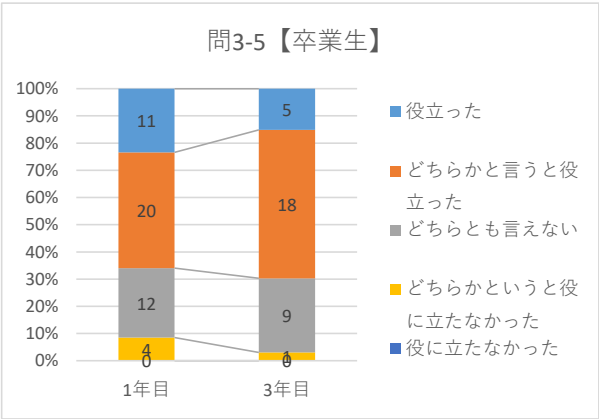
問3-4看護の質向上に向けて探究心：人々が健康に生きるための支援を科学的に探求するための基礎的能力が身についている



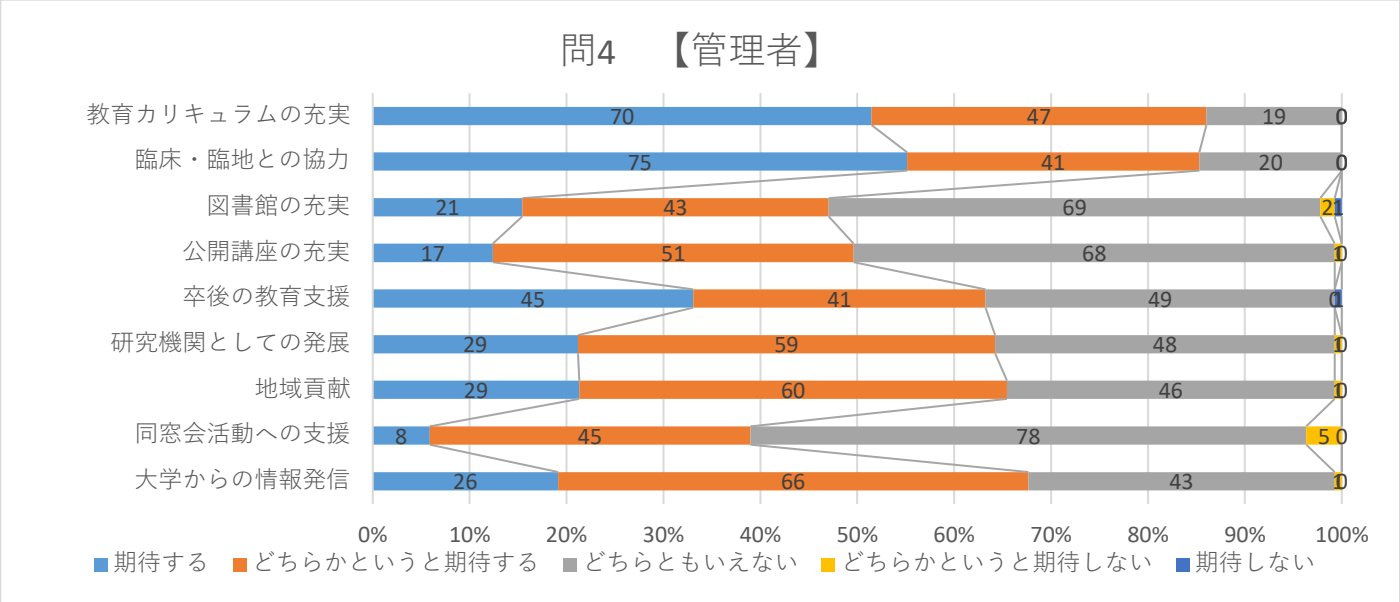


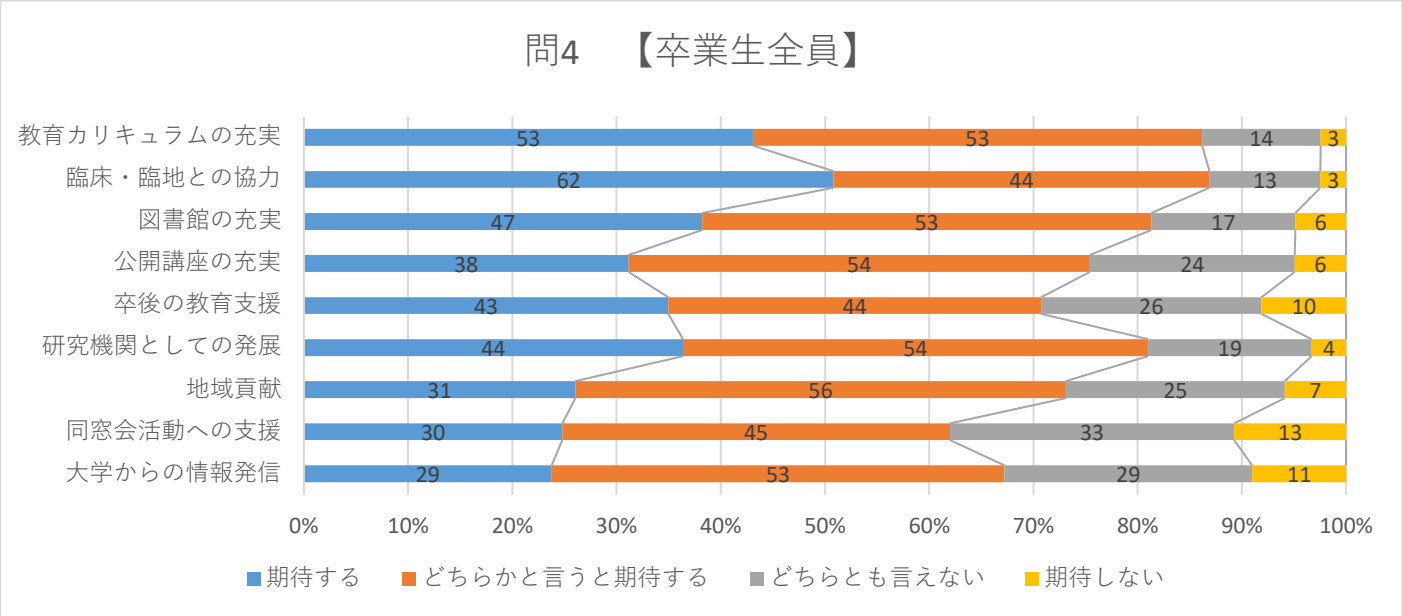
問3-5継続的自己研鑽：保健医療福祉に貢献するために専門的分野についての継続的自己学習能力を身につけている



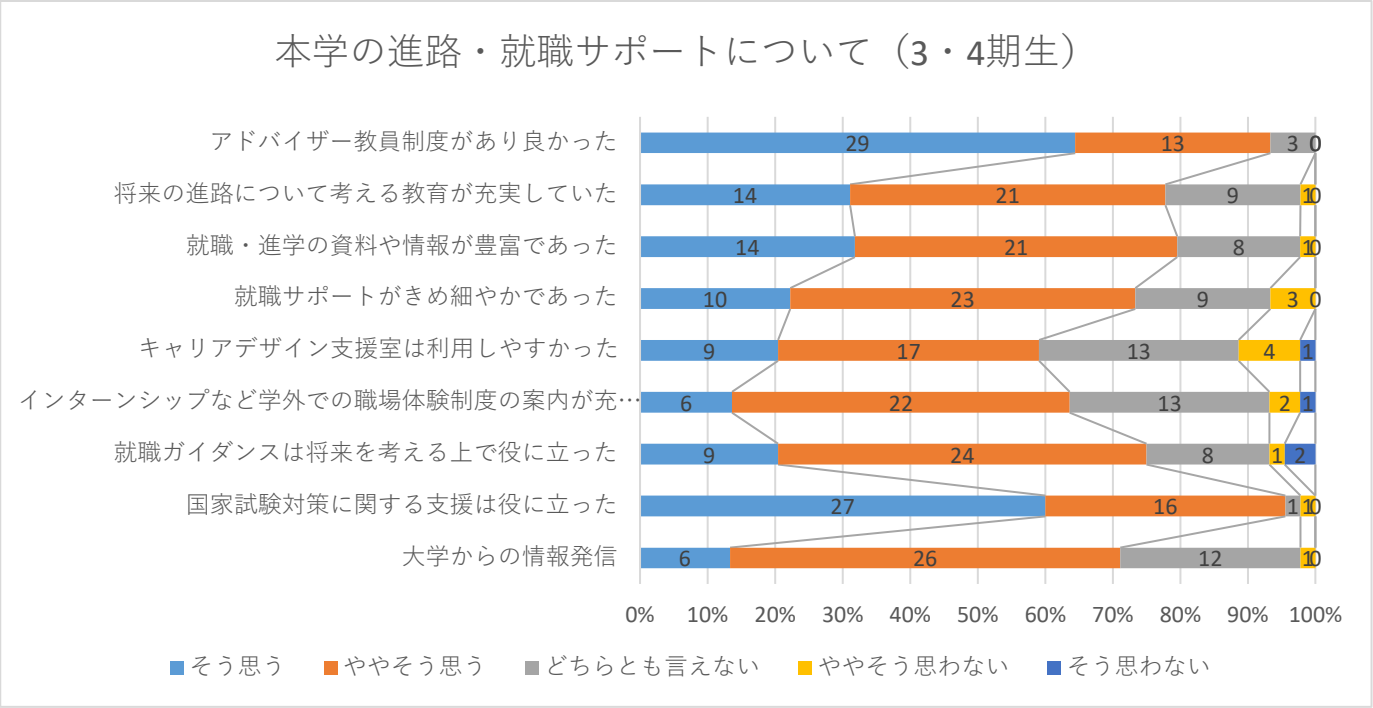


5.大学に期待すること

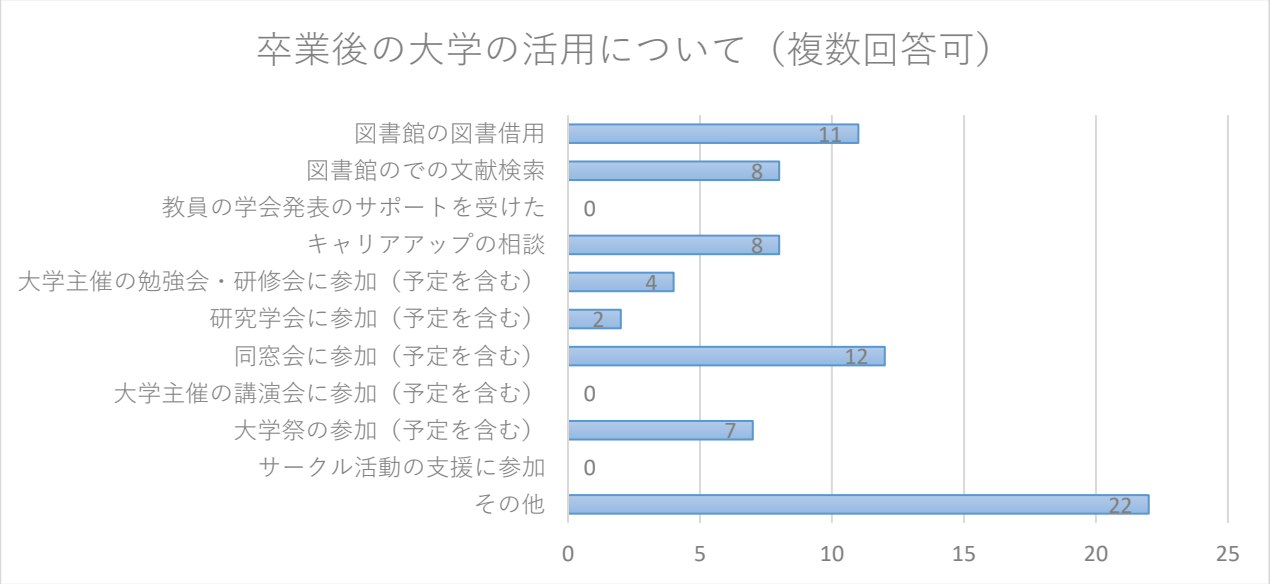




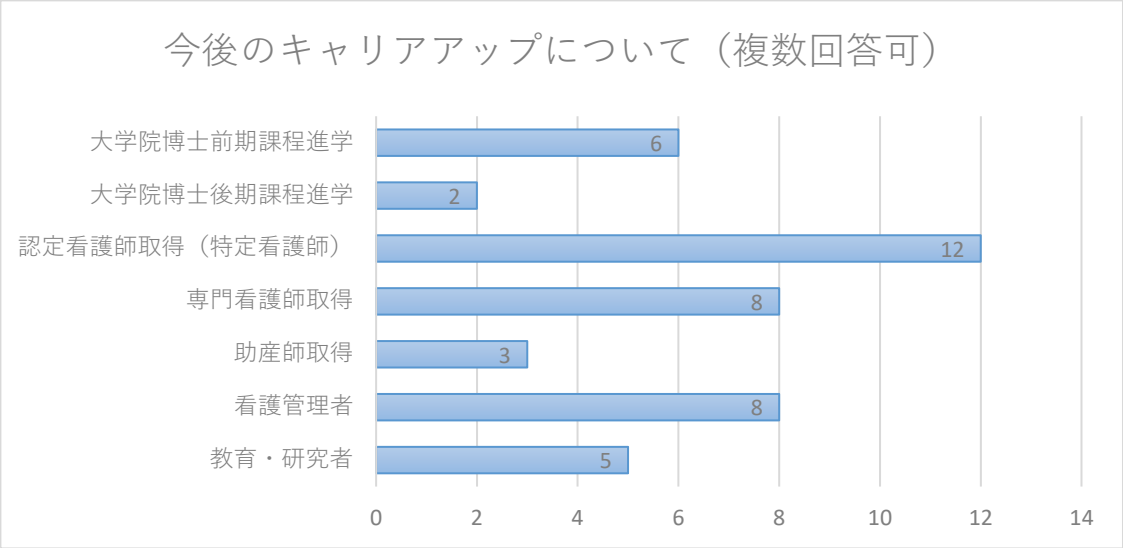
6.本学の進路・就職サポート：卒業生対象



7．卒業後の大学の活用：卒業生対象



8．今後のキャリアについて：卒業生対象



【認定看護師あるいは専門看護師にチェックした方の希望分野】

・がん看護
・嚥下・訪問
・褥瘡・糖尿病・輸液管理
・クリティカルケア
・手術室
・集中治療
・緩和
・認知症認定看護師
・精神科
・小児
・未定

卒業生アンケート結果（令和４年９月実施）

１～４期生３８５人のうち１２６人（３３％）から、また卒業生が就業している６７施設のうち４１施設（６１％）から回答があった。

● 就業状況

ほとんどの卒業生が県内に在住し、看護師として就業している。看護師の就業場所は一般病院で多いが、精神科やクリニック・訪問看護ステーションと活躍の場は広がっている。保健師や養護教諭もその資格を活かし就業している。保健師は、市町村の保健センター、養護教諭は、学校で就業している。

● 正確な知識と技術を対象に安全で基本的な看護実践

３年目には約９０％の卒業生が、安全で基本的な看護が実践できていると評価している一方で、管理者は、１年目に約５５％だったものが、３年目には約８５％まで実践できるようになったと評価している。経験により看護実践能力は上がっているが、管理者からは、もっと高いレベルが期待されている。

●問題解決に向けた対象の特性に応じた看護実践

３年目には８２％の卒業生は実践できていると評価しているが、管理者は７３％しかできていないと評価している。看護問題が複雑化、多様化している中でますます管理者からの期待が大きく、看護師としての研鑽する努力が求められる。

●緊急時の対応能力

１年目の卒業生は２３％しかできなかったものが、３年目には６７％まで対応できるようになったと自己評価している。管理者は、１年目には４％しか対応できなかったが、３年目には４６％までできるようになったと評価している。両者の評価に差は大きいが、経験を積み、緊急時の対応研修などにより能力は相当レベルアップしていると思われる。

● 看護実践や自己の成長のために他者の支援を求めること

ほとんどの卒業生が他者に支援を求めることができると評価しているが、一部うまく支援を求めることができない卒業生がいる。一方管理者は、1 年目には７１％だったものが、３年目には７７％の人が支援を求めることができるようになったと評価している。一日も早く職場に慣れて、先輩、上司に積極的に支援を求める姿勢が必要である。

● チームの一員として自分の役割を認識した行動

３年目の卒業生は、８２％が自分の役割を認識した行動ができるようになったと評価している。また、管理者も３年目には同程度できると評価しており、双方に大差は無く、チームワークの重要性を認識した行動ができると思われる。

● 日常業務の中での問題提起

３年目には６６％が問題提起できると評価している一方、管理者は、３年目になっても５５％しかできていないと評価している。卒業生からすれば問題提起しているつもりでも、管理者からすれば物足りなさを感じているからではないかと思われる。今後も日頃から問題意識を持って、日常業務に取り組む姿勢が必要である。

● 主体的に学習の場を求め、自己の課題に取り組むこと

７０％の卒業生が取り組んでいると評価しているが、管理者は期待が大きいのかそこまで評価していない。経験に加え、主体的に学習しキャリアアップしていくためにも自己課題に取り組む姿勢は重要である。

● 後輩や学生を指導すること

卒業生も管理者も少しずつではあるが年々評価は上がっている。後輩を育てること、学生に教えることが自己成長につながることを意識しながら努力することが必要である。

● 豊かな人間性と広い視野

幅広い教養や多様性、グローバルな視野を身に付けるには、大学教育で学んだことを基本として、日常生活の中で自ら積極的に行動し、情報収集するなど社会への関心を持つ努力が必要である。

● 看護の専門的知識・技術

多くの卒業生が、人々の健康ニーズに対応するための看護実践に必要な基礎的能力や保健医療福祉において調整･連携し、協働する能力を身に着けるのに役立ったと評価している。一方管理者は、経験を積むほど専門的知識や技術が備わっていると評価している。専門的知識や技術は日進月歩で進化しており、卒業生すべてが日々努力することを求められている。

●看護専門職としての判断力

専門職業人として高い倫理観をもち、科学的・論理的思考に基づいて判断することに約８０％の卒業生が役立ったと評価している一方、管理者は、３年目でも４５％程度しか備わっていないと評価している。臨床の場で多くの症例や市民と触れ合う中で、看護専門職としての判断力を養う努力をすることが求められる。

●看護の質向上に向けて探求心

人々が健康で生きるための支援を科学的に探究するための基礎的能力を身に着けるのに役立ったと約 70%の卒業生が評価している。管理者は５０％程度であると評価している。この差を埋めるべく常に看護の質向上に向けた探求心への努力が求められる。

●継続的自己研鑽

保健医療福祉に貢献するために専門的分野についての継続は、自己学習能力を身に付けるために役立った卒業生は６５％以上いる。一方、管理者は、５０％にも満たないと評価している。今後さらなる自己研鑽の継続が必要である。

●大学に期待すること

卒業生から期待することの上位は、教育カリキュラムの充実や臨床・臨地との協力、教育機関としての発展が多い。管理者からは、教育カリキュラムの充実や臨床・臨地との協力は、卒業生と同じだが、大学からの情報発信が３番目に多かった。地域から期待され、選ばれる教育機関となるためには、情報発信は必要不可欠である。

●本学の進路・就職サポート

アドバイザー教員制度、国家試験対策に関する支援、この２点の評価が非常に高かった。それ以外の項目についても概ね評価は高く、今後とも学生、教職員一体となって、本学のレベルアップのために努力を惜しまないことが必要である。